

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その7)

— B2層(まとめ) —

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、2007年度から「神奈川県における旧石器時代の遺物分布」として資料集成に着手し、これまでに上層から順にL1S層からL2層までの出土石器群を対象として、その分布状態の集成を行ってきた。これまでにL1S層～L1H層、B1層からL2層とある程度層準を区切ってそれぞれの層ごとに集成結果から見出される特筆すべき点の抽出を行っている。昨年度からは、さらに下層であるB2層出土の遺物を対象とした集成を開始し、この2ヶ年で既刊の発掘調査報告書より256ヶ所の遺物集中を集成した。

今年度はB2層の最終年度として、昨年度掲載し得なかった集成の残り105ヶ所の一覧を掲載するとともに、B2層は堆積が厚いため、集成した石器群を出土層位から上下に区分し、各々について「器種組成」・「石材組成」・「石器集中と遺構分布」の視点からその様相をまとめた。(三瓶)

1. B2層上部の石器集中

a) 石器集中の器種組成

検討資料を抽出するにあたり、層位的位置づけの不明確な資料を除外し、また石器数4点以下の事例を除外した。また、分布や接合関係からまとまる石器集中は1つにまとめて集計した。その結果、81の石器集中、45組の石器群が抽出された。その上で簡潔に比較するため、石器組成を狩猟具、加工具(精製)、加工具(粗製)、礫塊石器、剥片、石核の6つのカテゴリーに分けて集計した(第1表)。

「狩猟具」には角錐状石器、ナイフ形石器、尖頭器を含めた。このうち問題となるのは尖頭器である。上和田城山遺跡第IV文化層では尖頭器3点の出土が報告されているが、2点は角錐状石器に再分類されており、1点は単独出土で本来はより新しい時期に属する可能性が高い。南葛野遺跡第II文化層の尖頭器は石器集中付近からの出土だが出土層位が他の石器より上層で、共伴しない可能性がある。栗原中丸遺跡第VI文化層の「尖頭器様石器」はナイフ形石器に分類してよいと見られる。したがって集計に取り上げた中で尖頭器の出土例として残るのは高座渋谷団地内遺跡第V文化層の事例のみとなる。

「加工具(精製)」には搔器、削器、錐形石器、彫器を含めた。このうち、錐形石器、彫器はごく僅か見られるのみであり、搔器・削器類がこのカテゴリーの大半を占める。特に円形搔器が特徴的である。

「加工具(粗製)」には二次加工剥片を含めた。本来なら使用痕のある剥片もこのカテゴリーに含まれるはずだが、素材が黒曜石の方が使用痕(または微細な剥離痕)が観察されやすいなど、分類基準が一定しない可能性が高いため、剥片として集計している。

「礫塊石器」には磨石、敲石などを含めた。

石器群の器種組成の傾向としては狩猟具が1点以上伴う事例が多いことで、45石器群中34石器群と7割以上である。但し角錐状石器は相対的に少なく、複数伴う事例は3例しかない。加工具類についても精製・粗製とも伴わないのは13石器群にすぎず、やはり7割以上の石器群で1点以上出土している。剥片剥離等の痕跡

第 1 表 B2層上部出土石器群の石器組成

遺跡名	文化層	集中部	狩猟具	加工具 (精製)	加工具 (粗製)	礫塊石器	剥片	石核	石器計
代官山	VI	A-H	21	5	14	0	398	15	453
用田南原	VI	1	10	7	0	2	274	3	296
高座渋谷団地	V	2, 3, 5, 8, 9, 10, 13	23	6	17	0	213	19	278
南葛野	II	第12号拡張区(S1-5)	26	13	8	0	134	0	181
橋本	IV		9	10	0	0	138	11	168
南葛野	II	第11号拡張区(S1・2)	7	9	3	2	134	8	163
柏ヶ谷長ヲサ	VI	1, 2	10	5	2	2	128	4	151
吉岡X	V	3	5	3	0	0	85	0	93
高座渋谷団地	V	1, 4	14	1	2	0	70	0	87
南葛野	II	第 2 号拡張区(S1)	0	1	0	0	78	2	81
吉岡D区	B2	2	10	1	11	0	53	0	75
南鍛冶山		0501	2	1	1	1	53	2	60
川尻	V	1-4	3	3	1	14	27	1	49
月見野上野第1地点	VIII	1	4	0	0	0	39	0	43
用田南原	VI	2	7	2	0	1	27	2	39
南葛野	II	第15号拡張区(S1)	1	1	3	1	27	2	35
栗原中丸	VI	1	7	0	2	1	21	0	31
高座渋谷団地	V	6	3	0	3	0	22	1	29
高座渋谷団地	V	7	5	1	0	0	21	1	28
代官山	VI	I	0	0	0	0	24	0	24
高座渋谷団地	V	11	2	1	0	0	17	3	23
神明若宮地区内C地区	III	1	6	0	0	0	15	2	23
神明若宮地区内C地区	III	2	3	0	0	0	20	0	23
代官山	VI	L-N	3	1	4	0	13	0	21
代官山	VI	J-K	0	2	0	0	15	2	19
代官山	VI	O-Q	3	1	0	2	9	4	19
根下	I	1	1	2	0	0	14	0	17
上和田城山	IV	C・D-3グリッド	1	0	0	2	10	4	17
用田大河内(第6次)	VI	2, 6	0	0	1	4	10	1	16
用田大河内(第6次)	VI	5	1	3	0	0	7	2	13
南葛野	II	第13号拡張区B	0	0	0	0	9	1	10
上草柳遺跡群 大和配水池内	VIII	2	2	0	1	0	7	0	10
南葛野	II	第13号拡張区C	0	0	1	0	7	0	8
上草柳遺跡群 大和配水池内	VIII	5	1	1	0	0	5	1	8
南鍛冶山		0502	0	0	0	0	5	2	7
高座渋谷団地	V	12	3	0	1	0	3	0	7
上草柳遺跡群 大和配水池内	VIII	1	0	1	1	0	5	0	7
代官山	VI	X	1	1	0	0	4	0	6
南鍛冶山		0701	0	0	0	0	5	0	5
代官山	VI	U	0	0	0	0	5	0	5
代官山	VI	W	0	0	0	0	5	0	5
寺尾	V	1	1	0	0	0	2	2	5
本入こざっ原	IV	1	2	0	1	0	2	0	5
上草柳遺跡群 大和配水池内	VIII	3	1	0	0	0	4	0	5
上草柳遺跡群 大和配水池内	VIII	4	1	0	0	0	4	0	5

が少ない小規模な石器群でも狩猟具・加工具を1点以上伴う事例が多いため、石器点数に占めるツールの割合は小規模な石器群の方が高い傾向がある。石器群の規模にかかわらず最小限のツールの構成が各地点に残されたものと解釈できる。(中村)

b) 石器集中の石材組成

昨年度から集成を行っていたB2層を対象としたデータのうち、報告内容からB2層上部出土と捉えられる石器群を基に検討を加える。ただし、集成し得たデータのうち石材組成が明らかにされていない遺跡やブロックは除き、16遺跡66ブロックを検討の対象とした。

出土点数のみの比較では、全2342点(出土点数が判明しているデータのみ集計、以下同)のうち、黒曜石が900点(38%)と4割近い組成率を誇る。それ以外については、凝灰岩系石材264点(11%)、安山岩193点(8%)、

頁岩192点(8%)、ガラス質黒色安山岩41点(玄武岩197点を含む238点とすると10.1%)ともに1割程度の組成率となる。数値的には黒曜石が突出して用いられていたことが分かる。ただ、石材名は、昨今やや改変されているものもあるが、今回提示のデータは、報告書データを基としているため、これまでの報告書データを現状での判断基準により再考する必要があることを断わっておく。しかしながら、黒曜石とそれ以外ということの、判断基準には変化は無いと考えられるため、B2層上部では、黒曜石が最も多用されていたという事実には変わりはないと考えられよう。黒曜石以外の石材については、その組成に目立った特徴は見いだされないが、前述のとおり、今回対象とした石器群以外も含め、一度再考の必要があろう。

黒曜石について、今回対象とした遺跡のうち5遺跡で産地同定分析を実施しており、その結果が報告書内に記載されている。これらを第2表にまとめた。表を見ても分かるとおり、多くが伊豆・箱根系の黒曜石という分析結果が得られており、伊豆・箱根系の中でも畑宿系が群を抜いていることが分かる。今回の対象が5遺跡と少なく、絶対的なこの時期の傾向とするには、まだ資料不足は否めないが、今後の資料・情報増加とともに詳細な傾向が見えてくるものと思われる。

現時点でのB2層上部の石器群における石材利用の特徴としては、伊豆・箱根系の中でも畑宿系の黒曜石が主体をなして利用されており、これら以外には、在地系石材である凝灰岩系の石材や、安山岩やガラス質黒色安山岩などの石材により石材供給を補っている様子が看取されよう。(大塚)

第2表 B2層上部出土黒曜石の産地同定結果

遺跡名	文化層	判定点数	伊豆・箱根系					
			畑宿系	(箱根)	柏峠系	鍛冶屋系	上多賀系	(伊豆)
柏ヶ谷長ヲサ	VI	134	131		2			
上土棚南6次	I・II	332	258		16	8	8	
南葛野	II	83		20				36
代官山	VI	—	●					
橋本	IV	—	●					
●点数は不明 カッコつきの産地は地域の判別のみ			信州系					北関東
			(信州)	和田峠・ 鷹山系	西霧ヶ 峰系	男女倉 系Ⅲ	冷山・ 麦草峠系	高原山系
				1				
				1	1	7	32	1
			8					
				●				

c) 石器集中と遺構分布

分布範囲(規模)が数値化された石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は、川尻V No.1・3等、2.5mの分布範囲以上で概ね伴う傾向にあることが指摘され(南鍛冶山0701では「備考」では伴う遺構が記載されていないが、「器種組成」で「礫55」は本来礫群と推定されるため、ここではその石器集中を礫群を伴う石器集中として扱う)、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は、上和田城山IV等、3.2mの分布範囲以上で概ね伴う傾向にあることが指摘される。また礫群を伴う石器集中は、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中よりも分布範囲が小さい傾向にあることも指摘される。

石器点数が数値化された石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は川尻V No.3の4点以上で、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は南鍛冶山0503の14点以上であるが、代官山VINo.Bの37点以上の石器集中や南鍛冶山0701の60点以上の石器集中でも遺構を伴わない石器集中もある。なお石器集中は、石器点数が多くなると礫群よりも炭化物集中(木炭集中)を伴う傾向にあることが指摘される。

分布密度が数値化された石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は1.25以上で、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は0.15以上であることから、礫群を伴う石器集中のほうが、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集

中よりも分布密度が高いという傾向が指摘される。また分布密度が南鍛冶山0502の44.4や南鍛冶山0701の7.89の高い石器集中でも遺構を伴わない石器集中もあることが確認される。分布状態が捉えられた石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は橋本Ⅴの「散漫」と川尻ⅤNo.1の「集中」で、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は南鍛冶山0501の「北寄りに密集」であることが確認された。3石器集中しか分布状態が捉えられなかったが、礫群を伴う石器集中と炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中では炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中のほうが「密集」した部分が見いだされる石器集中である可能性が考えられる。

器種組成が明らかにされた石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は代官山ⅤNo. Kの剥片と石核等、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中も南鍛冶山0503の剥片と礫器等のように2種類以上の器種により構成される石器集中であることが確認される一方、遺構を伴わない石器集中は川尻ⅤNo.6の剥片や代官山ⅤNo. T等、単独の種類でしか構成されない石器集中もあることが確認される。個別の器種のうちでナイフ形石器を伴う石器集中では橋本Ⅳ、川尻ⅤNo. 1・3・4、代官山ⅤNo. A・G・N・O・Qで礫群(礫集中)を伴い、橋本Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中を伴うことが確認される。槍先形尖頭器を伴う石器集中では上和田城山Ⅳで炭化物集中(木炭集中)を伴うことが確認される。角錐状石器を伴う石器集中は根下Ⅰで礫群を伴うことが確認される。搔器・削器・スクレイパー・彫器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片のいずれかを伴う石器集中では橋本Ⅳ、上和田城山Ⅳ、川尻ⅤNo. 1・2・3、根下Ⅰ、代官山ⅤNo. A・G・J・L・M・N・O・P・Qで礫群(礫集中)を伴い、橋本Ⅳ、上和田城山Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中(木炭集中)を伴う。石核を伴う石器集中では橋本Ⅳ、川尻ⅤNo. 1・2、代官山ⅤNo. A・G・J・O・P・Qで礫群(礫集中)、上和田城山Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中(木炭集中)を伴うことが確認される。叩石(敲石・ハンマー)を伴う石器集中では川尻ⅤNo.4、代官山ⅤNo. P・Qで礫群、上和田城山Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中(木炭集中)を伴うことが確認される。以上、石器集中における器種と遺構との関係を概観したが、何らかの傾向を指摘しがたいことが判明した。

石材組成が明らかにされた石器組成のうちで礫群かもしくは炭化物集中を伴う石器集中は、川尻ⅤNo.1の頁岩や代官山ⅤNo. Gの黒曜石等を除くと2種類以上の石材で構成されている石器集中が大半であるのに対して、遺構を伴わない石器集中は大半が2種類以下の石材で構成されていることが明らかにされた。(井関)

2. B2層下部の石器集中

a) 石器集中の器種組成

対象とした遺跡と文化層は出土層位が「B2L」とされた栗原中丸Ⅶ、かしわ台駅前Ⅴ、柏ヶ谷長ヲサⅦ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ、長堀南Ⅵ、上和田城山Ⅳ・Ⅴ、上草柳第2地点Ⅱ、福田札ノ辻Ⅵ、早川天神森Ⅳ、地蔵坂、大和配水池内Ⅸ、鷹見塚、菖蒲沢大谷Ⅲ・Ⅳ、福田丙二ノ区、津久井城跡馬込地区の14遺跡20文化層88石器集中である。B2層下部から出土した石器器種は、ナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、彫器、削器、搔器、スクレイパー、揉錐器、楔形石器、RF、UF、剥片、碎片、礫器、石核、磨石(状円礫)、叩(敲)石、台石、原石である。この中からナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、磨石(状円礫)について、石器集中でのありかたについて述べる。

本層はナイフ形石器を主たる石器とする時期である。ナイフ形石器は、切出形、基部加工が卓越する。これに国府型がみられる。ナイフ形石器は、上記の石器集中全体の約半数、50石器集中から出土している。逆の言い方をすれば、半数の石器集中がナイフ形石器を組成していない事を示す。文化層の各石器集中においてもナイフ形石器を組成するものとしめないものがみられる。この場合、遺物点数が少ない石器集中にはナイ

フ形石器が含まれていない傾向がみられる。

ナイフ形石器とともに本層に特徴的な器種は、角錐状石器である。角錐状石器は、B2層下部から上部にかけて出土し、素材を縦に用い、形態も縦に長く、基部を作り出すような形態から、やや寸詰まりで基部が平坦な形態へと変化する(亀田 1996)ことが指摘されている。これら角錐状石器は、非常に高い確率でナイフ形石器と共伴している。ナイフ形石器と共伴しない事例は、長堀南Ⅵのみである。同一文化層内での石器集中における組成もまた興味深い。柏ヶ谷長ヲサⅦでは7ヶ所、同Ⅸでは24ヶ所、Ⅹでは4ヶ所、津久井城跡馬込地区4では3ヶ所、菖蒲沢大谷Ⅲでは12ヶ所の石器集中が確認されているが、角錐状石器を組成する石器集中は各文化層で1～2ヶ所に過ぎない。組成するか、しないかで集団の違いや、石器集中での作業(機能)の違いを示すかはわからないが、角錐状石器という石器の持つ特異性を示すものと考えられようか。

尖頭器は、柏ヶ谷長ヲサⅨの1ヶ所の石器集中から2点出土している。これらを角錐状石器の範疇で捉える見解も有り、検討を要する。

磨石(状円礫)は、B2層上部でも見られるが、B2層下部が圧倒的に多い。出土した遺跡は、柏ヶ谷長ヲサⅦ・Ⅸ、早川天神森Ⅵ、菖蒲沢大谷Ⅲ・Ⅳである。出土した遺跡は少ないが、文化層内ではある一定の石器集中から出土がみられる。菖蒲沢大谷Ⅲでは半数の石器集中から出土がみられる。この石器は、ある範囲にまとまって出土することが特徴である。このことに関して、一地点にまとめて保管し、その場所で複数の人間がまとめて使用したことが想定されている(加藤 1996)。さらに礫群との関連から、植物質食料等の加工の用途を想定される(加藤前掲)ことから、限られた遺跡で、かつ限られた石器集中にのみ存在する石器と言えるだろう。(脇)

b) 石器集中の石材組成

ここでは、B2L層の主な石器群を中心に石器の使用石材を検討する。今回集成した遺跡において、その報告にて明確にB2L層中から出土した石器群とされているものは、14遺跡20文化層を数える。そして、単独出土を含む石器集中は88ヶ所を数え、そのうち50点以上の石器が出土している石器集中地点は、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の第Ⅶ文化層1・2、第Ⅷ文化層1・7、第Ⅸ文化層2・3、5～12、14～18、第Ⅹ文化層1・2ブロックと上草柳第Ⅱ地点第2文化層のA、菖蒲沢大谷遺跡第Ⅲ文化層5、第Ⅳ文化層2、福田丙二ノ区遺跡第Ⅲ文化層1ブロックの25ヶ所である。石器に使用されている石材をみると、黒曜石、硬質細粒凝灰岩、中粒凝灰岩、チャート、頁岩、珪質頁岩、ホルンフェルス、安山岩、ガラス質黒色安山岩、流紋岩、結晶片岩、鉄石英、玄武岩と多種多様である。とりわけ硬質細粒凝灰岩と黒曜石の頻度が高く、黒曜石はこれら25ヶ所全ての石器集中から出土している。なお、当概期88ヶ所の石器集中地点においても、実に80ヶ所(90%)において黒曜石が出土している。因みに、相模野台地で石器の素材として最も多用され、相模川水系で入手可能な在地石材である硬質細粒凝灰岩でさえ、88ヶ所中46ヶ所とおよそ半数の頻度にとどまる。このことから、数量的な多少はあるものの、当概期の石器群において如何に黒曜石が多用されているかが分かる。

では、これらの黒曜石はどこから入手しているのだろうか。近年、蛍光X線法による黒曜石全点の産地同定分析が盛んに実施されるようになり、過去に調査された資料についても産地同定が試みられ、新たに産地の判明した試料も増加している。海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡では黒曜石全点の原産地同定分析を実施し、興味深い結果が得られている。B2L層の石器群とされる第Ⅶ文化層から第Ⅹ文化層の黒曜石計1506点のうち、1493点と実に99%が伊豆・箱根系の畑宿産または柏峠産の黒曜石であった。

ここでは、最も充実した内容を持つ第Ⅸ文化層を例に検討してみたい。柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層は、

石器総点数2855点、石器集中24ブロックを数える。このうち黒曜石は1164点(40.7%)を数え、1120点について原産地同定がなされている。その結果55%が畑宿産、約44%が柏峠産とほぼ99%が伊豆・箱根系である。他に和田峠系、霧ヶ峰系、蓼科系、神津島系、高原山系がごく少量みられるが、これらは「ナイフ形石器や削器など製品として」搬入される事例が多いことが指摘されている(堤 1997)。黒曜石は24ブロック全てで認められ、本文文化層から出土した113点のナイフ形石器のうち62点が黒曜石製で占められ、その他のガラス質黒色安山岩製26点や硬質細粒凝灰岩製23点と比較して倍以上と群を抜いている。石材全体に占める使用頻度や主要器種への加工頻度からも当概期において黒曜石は中心的な石材と位置づけられ、その素材獲得のための入手経路も伊豆・箱根系に偏っており、かなり保守的で限定的であった様子が窺える。(畠中)

第3表 文化層別黒曜石原産地一覧

	畑宿		柏峠		和田峠系		霧ヶ峰系		蓼科系		神津島1群		高原山1群	
	点数 (%)	重さ (g)	点数 (%)	重さ (g)	点数 (%)	重さ (g)	点数 (%)	重さ (g)	点数 (%)	重さ (g)	点数 (%)	重さ (g)	点数 (%)	重さ (g)
第Ⅶ文化層	3	22.46	175	443.3										
	1.69%	4.82%	98.31%	95.18%										
第Ⅷ文化層	15	53.45	69	96.5										
	17.86%	31.05%	82.14%	68.95%										
第Ⅸ文化層	616	2325	489	1739.4	2	14	2	2.9	1	4.3	2	2.08	8	30.9
	55%	56.45%	43.66%	42.23%	0.18%	0.34%	0.18%	0.07%	0.09%	0.10%	0.18%	0.05%	0.71%	0.75%
第Ⅹ文化層	62	414.1	58	294										
	51.67%	58.48%	48.33%	41.52%										
第Ⅺb文化層	4	44.84												
	100%	100%												
合 計	700	2859.85	791	2573.2	2	14	2	2.9	1	4.3	2	2.08	8	30.9
	46.5%		52.5%		0.1%		0.1%		0.1%		0.1%		0.5%	

* 望月明彦氏作成表一部改変

c) 石器集中と遺構分布

B2層の下部は、層厚が極めて厚く、条件が良好な場所では、上・中・下の3枚あるいはそれ以上に区分出来る。よって、ここでは各報文に基づき、層位的に下位の遺跡の事例から順に各遺構を観察する。

まず下部～下底部付近から出土した石器群として、柏ヶ谷長ヲサⅩが上げられる。4基のブロックがほぼ東西方向に一直線に検出される。1・2号ブロックは配石・礫群との明確な平面的重複関係が認めらるが、3・4号ブロックは礫群・配石と近接した出土状態を呈する。但し、1・2号ブロックは、共に遺物の分布範囲を17×11m・20×12mと広く捉えているが、遺物の分布密度は0.45・0.67と極めて小さい。礫群17基、配石10基が検出され、1・2号ブロックに礫群は6基ずつ、配石は1号に1基、2号に4基が重複はしているものの、礫群の構成礫数は2～18点、配石は1または2点であり、礫群・配石の規模は比較的小さい。

菖蒲沢大谷Ⅳは、B2L層下部から出土した石器群である。4基発見されたブロックのうち、2号ブロックのみが遺物の分布密度が5点代前半と高いものの、他の3基は1点代前半と低い。2～4号ブロックは、各々10～20m程の距離を隔てて存在するものの、1号ブロックのみは他のブロックと50m以上の隔たりが認められる。報文中では、この1号ブロックの中で紹介されているが、本ブロックからは計17点の遺物が出土しているものの、この内の12点は磨石状円礫であり、この段階の石器群に特徴的に見られる磨石状集石と言えよう。他のブロックと平面的独立性が強く、小規模な石器ブロックに磨石状集石が平面的に重複して検出されていると考えられる。

中部付近から出土した柏ヶ谷長ヲサⅨは、相模野台地上の本時期の石器群の中で、規模・出土数共に充実した内容を示す石器群である。石器のブロック数は24箇所、ここから出土した石器類の点数は計2855点を数える。ブロックの規模は、最少11点、最高718点であり、100点未満15箇所、100～200点未満6箇所、200～

300点未満 2 箇所、700点以上 1 箇所である。これに礫群125基、配石61基が前述のブロックにほぼ重複して検出される。礫群の規模は、1～50点未満114基、50～100点未満 7 基、100～152点以下 4 基とこの段階においても、数量的に最も多いのは1～50点未満と構成礫数が少量のものであった。また、この中には、下底部で1基しか検出出来なかった磨石状集石が、8・11・15・24号ブロックでも検出される。11号ブロックでは、ブロックの中央部で3点の磨石状円礫の集中が確認されるが、他のブロックでは、分布の外縁部にその集中が認められる。

上部の柏ヶ谷長ヲサⅧは、規模的にはⅨには及ばないものの、石器1121点がほぼ7箇所のブロックに分かれて出土している。本文文化層からは、同時に礫群15基、配石 5 基が検出され、各々1基ずつはブロックとの重複は認められなかったものの、他は全てブロックとの重複関係を有して検出されている。明確な磨石状集石は確認出来ないものの、1号ブロックでは、台石(1点)・磨石(2点)・大形剥片?が遺棄されたような状態で、ブロックの外縁部より検出されている(配石1)。また、その配石1の周辺からは、集石ほど密集はしていないものの、ブロックの外縁部に沿って磨石4点が出土している。

津久井城跡馬込地区4では、3箇所のブロックが検出されている。いずれのブロックにも礫群が伴う。ブロック・礫群とも小規模であり、遺物分布密度はいずれも1.00未満である。礫群の構成礫数は、各々10・31・3点と小規模である。1号ブロックでは重複するが、2・3号ブロックでは、いずれも石器分布の外縁部に位置し、ブロック・礫群の平面分布は近接してはいるものの必ずしも重複はしていない。(栗原)

おわりに

2012年度と今年度に集成を行った B2層の遺物分布は、合わせて39遺跡・54文化層の石器集中256ヶ所を数える。今回は、B2層を上部と下部に分け、まとめとして集成結果をもとにそれぞれ石器集中の器種組成・石材組成・遺構分布との関係について検討を行った。そこでは、器種組成と石材組成についての全体的な特徴は、当然ながら以前(1993～1998年度)に検討を行った層位別(時期別)の石器群の様相と共通することが明らかにされたが、石器集中個別の特徴については十分明らかにすることはできなかった。特に、石材組成については、石器製作作業を行ったと推定される石器集中では使用した母岩の石材が多くを占めることになり、石器集中を遺した集団の道具箱の石材組成とはかけ離れた内容を示していることも想定される。この点は、器種組成についても程度の違いはあるものの同様に考えられる。また、遺構との関係については、当該期の遺構は礫群と配石がみとめられ、多くは石器集中と重複して検出されている。そして柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ⅸ・X文化層のように、石器集中の規模が径10mをこえるものでは、出土石器も多く、複数の礫群と重複している。これらの石器集中は、その範囲の捉え方の問題もあるが、石器の数量が100点以上、中には800点前後もあり、集中的に石器製作作業を行った場所であることを示している。また、石器集中ごとの個別別資料分析を行うことにより、こうした大規模な石器集中は小規模な石器集中が重複したもの、つまり回帰的な移動により複数回の居住によって残された可能性も考えられる。このほか、厳密には遺構とはいえないが、磨石状円礫が数点以上集中して出土することも当該期の特徴であり、これらは小規模な石器集中から検出される傾向があることが指摘される。なお、これまで各遺跡の遺物分布の集成を行った結果、報告されているデータが一樣ではなく、中には石器集中ごとの数量的な器種組成や石材組成が不明な遺跡が多いという問題がある。このため、石器集中についての分析・検討は、こうしたデータが報告されている特定の数遺跡を対象に行わなければならない、その検討結果の普遍性がどこまで保証されるかが問題となる。

当財団職員等による各時代のグループ研究は1993(平成5)年度から行ってきたものであり、その歩みは当財団の歴史と同じく20年を迎えた。その中で、当プロジェクトでは、神奈川県内の旧石器時代遺跡に関する基礎資料の集成・検討を継続して行ってきた。現在行っている遺物分布の集成・検討は、2007年度以来7年目になり、まだL3層以下各層の集成・検討を残しているが、その遺跡数を考慮すると今回で大半の集成を終えたことになる。今後は、L3層以下各層の集成・検討とともに、これまでの集成・検討結果の総合とそれにもとづき神奈川県内の旧石器時代文化解明に向けた検討に取り組むことが課題となる。(鈴木)

引用文献

- 55 金山喜昭・土井永好・武藤康弘 1984 「第Ⅴ章 第4節 第Ⅳ文化層」『橋本遺跡 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会 pp. 19-20・pp. 125-127
- 90 曾根博明・中村喜代重 1979 「第Ⅴ章 第1節 先土器時代」『上和田城山』大和市文化財調査報告書第2集 大和市教育委員会 pp. 15-95
- 109 上田 薫・砂田佳弘 1987 『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11 神奈川県立埋蔵文化財センター pp. 230-284
- 111 望月 芳 1996 「第5章 先土器時代の調査」『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第3巻 先土器時代』藤沢市教育委員会 pp. 15-203
- 116 関根唯充・桜井準也ほか 1995 「第Ⅵ章第7節 第Ⅱ文化層」『南葛野遺跡－県道横浜・伊勢原線藤沢葛原地内に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』南葛野遺跡発掘調査団 pp. 140-273
- 120 御堂島 正・河野喜映・恩田 勇 1992 「第Ⅴ章 第1節 5 第Ⅴ文化層」『川尻遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告23 神奈川県立埋蔵文化財センター pp. 59-81
- 283 麻生順司 1987 「第Ⅲ章第1節 第Ⅰ文化層」『藤沢市大庭 根下遺跡発掘調査報告書』根下遺跡発掘調査団 pp. 10-19
- 335 栗原伸好 2002 「第Ⅴ章第5節(6) 第Ⅵ文化層(BB2層：角錐状石器)」『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告128 財団法人かながわ考古学財団 pp. 470-514・571-580
- 336 畠中俊明 2003 「第Ⅴ章第5節(5) 第Ⅵ文化層(BB2L層)」『葛原滝谷遺跡 葛原下滝谷戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告151 財団法人かながわ考古学財団 pp. 131-145・151-152
- 339 栗原伸好 2004 「第Ⅴ章第5節(3) 第Ⅵ文化層(BB2層：角錐状石器)」『用田大河内遺跡』かながわ考古学財団調査報告167 財団法人かながわ考古学財団 pp. 298-461・466-494
- 339 井関文明 2012 「第Ⅱ編第2章第5節第2項 第Ⅵ文化層」『用田大河内遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告278 財団法人かながわ考古学財団 pp. 129-166
- 340 栗原伸好 2004 「第Ⅴ章第5節(3) 第Ⅵ文化層(BB2層：角錐状石器)」『用田南原遺跡』かながわ考古学財団調査報告168 財団法人かながわ考古学財団 pp. 319-358・490-499
- 363 戸田哲也他 2006 「第Ⅱ章第3節 第Ⅲ文化層」・「第Ⅱ章第4節 第Ⅳ文化層」『菖蒲沢大谷遺跡 発掘調査報告書 藤沢市北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内遺跡群 菖蒲沢大谷地区』北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内埋蔵文化財発掘調査団 pp. 44-81・125-127
- 364 畠中俊明・井関文明 1999 「第Ⅴ章 第3節 第Ⅲ文化層(B2L層)の調査」『福田丙二ノ区遺跡』かながわ考古学財団調査報告68 財団法人かながわ考古学財団 pp. 231-242
- 367 吉田政行 2003 「第Ⅴ章第4節第6項 旧石器時代 遺物群Ⅴ」『吉岡遺跡群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告153 財団法人かながわ考古学財団 pp. 120-153
- 368 畠中俊明 2010 「第5章第7節 第4文化層」『津久井城跡馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249 財団法人かながわ考古学財団 pp. 360-374
- 369 麻生順司 2012 『藤沢椎名谷遺跡』藤沢市教育委員会 pp. 1-23
- 亀田直美 1996 「角錐状石器」『石器文化研究5』石器文化研究会 pp. 189-198
- 加藤勝仁 1996 「礫石器」『石器文化研究5』石器文化研究会 pp. 219-230
- 堤 隆 1997 「Ⅳ総括 3 石材利用について」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 pp. 489-492

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その7)

第4表 B2層の遺物分布

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m ²)	各集中No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共伴遺構等)
55	橋本	B2U	IV	-	-	-	173	-	散漫	ナ9、ス10、礫5、F127、Ch11、核11	黒156、珪岩7、粘3、硬砂2、玄1、その他4	礫群13、炭化物集中2
90	上和田城山	B2L	V	7426		5.2×4.5	49	2.09		彫1、削1、楔?1、石刃核1、核1	珪頁、安、黒、チ	礫群? (被熱礫8点)
90	上和田城山	B2U	IV	7426		3.2×1.7	24	4.41		ナ3、槍3、彫1、石核石器1、削1、核1、UF1、敲1	頁、珪、黒、瑪、多安、緑珪頁、硬凝、粘、チ、凝	木炭集中1 石器小集中2
109	代官山	B2U	VI	18750	A		248			ナ10、核1、RF6、UF6、調F1、F93、C131	黒243、凝2、安2、珪頁1	礫集中1
109	代官山	B2U	VI	18750	B		37			ナ1、彫1、RF1、UF1、F23、C10	黒37	
109	代官山	B2U	VI	18750	C		22			搔1、調F2、F11、C8	黒22	
109	代官山	B2U	VI	18750	D		22			ナ2、F13、C7	黒22	
109	代官山	B2U	VI	18750	E		34			ナ2、搔1、核3、RF1、UF2、調F1、F14、C10	黒7、粘27	
109	代官山	B2U	VI	18750	F		17			ナ4、RF1、UF2、F6、C4	黒14、粘1、珪頁2	
109	代官山	B2U	VI	18750	G		66			ナ2、錐2、核1、RF5、F44、C12	黒66	礫集中3
109	代官山	B2U	VI	18750	H		7			F4、C3	黒1、粘6	
109	代官山	B2U	VI	18750	I		24			F15、C9	粘24	
109	代官山	B2U	VI	18750	J		7			搔2、核2、RF1、F2	凝4、粘3	礫集中9
109	代官山	B2U	VI	18750	K		6			F3、C3	チ5、凝1	礫集中12
109	代官山	B2U	VI	18750	L		6			RF1、UF1、F4	黒2、凝1、チ1、粘1、珪頁1	礫集中14
109	代官山	B2U	VI	18750	M		7			RF2、F4、C1	黒6、チ1	礫集中13
109	代官山	B2U	VI	18750	N		8			ナ3、搔1、RF1、F2、C1	凝2、チ2、粘3、珪頁1	礫集中17
109	代官山	B2U	VI	18750	O		7			ナ1、核1、UF2、F1、調整C1、C1	黒4、凝2、粘1	礫集中18
109	代官山	B2U	VI	18750	P		5			彫1、叩1、核2、F1	黒3、粘1、砂1	礫集中20
109	代官山	B2U	VI	18750	Q		7			ナ2、叩1、核1、UF1、F2	黒4、チ1、凝1、砂1	礫集中22
109	代官山	B2U	VI	18750	R		3			ナ2、搔1	黒1、チ1、頁1	
109	代官山	B2U	VI	18750	S		3			ナ2、F1	頁3	
109	代官山	B2U	VI	18750	T		2			C2	粘1、チ1	
109	代官山	B2U	VI	18750	U		5			F4、C1	黒5	
109	代官山	B2U	VI	18750	V		3			彫1、UF1、F1	黒1、粘2	
109	代官山	B2U	VI	18750	W		5			RF1、C4	黒5	
109	代官山	B2U	VI	18750	X		6			ナ1、搔1、UF1、F1、C2	黒5、頁1	
111	南鍛冶山	L2L～B2U	501	49700		9.6×15	192	1.33	北寄りに密集	ナ2、削1、リタッチ1、核2、F50、C3、ハンマー1、礫132	黒14、珪頁33、頁10、斑2、粘1、シ2、ホ11、安19、火凝5、輝2、凝39、玄5、砂26、閃5、頁17、流1	炭化物集中
111	南鍛冶山	B2U	502			0.6×0.3	8	44.4		核2、F5、礫1	珪頁7、凝頁1	
111	南鍛冶山	B2U	503			8.5×10.7	14	0.15		F1、礫13	黒1、凝2、玄1、砂4、頁6	炭化物集中
111	南鍛冶山	B2U	701			1.9×4	60	7.89		F5、礫55	黒1、珪頁2、頁2、ホ7、安2、火凝2、輝凝3、凝7、珪頁6、玄5、硬砂19、泥1、斑3	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	1		1			ナ1	珪頁1	

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m ²)	各集中No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共伴遺構等)
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-2-S1	1.5×2	81	27	楕円状	削1、F78、核2	黒15、黒頁50、珪頁9、チ7	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	4		10			ナ1、搔1、礫8	黒1、珪頁1、安8	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	5		1			礫1	安1	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	9		5			角1、RF1、F3	黒4、珪頁1	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	10		3			ナ1、F2	黒2、チ1	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	11		166			ナ7、削3、搔5、彫1、RF3、F134、核8、敲2、亜石器3	黒141、黒頁2、珪頁2、凝頁6、チ11、玄安3	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-11-S1	3×2.2	121	18.3	中央密集	ナ3、搔4、彫1、RF3、核6、敲1、F100		
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-11-S2	1.1×1.6	22	12.5	散漫	ナ1、RF1、核1、敲1、F18		
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	12		735			尖11、ナ10、角6、錐1、削7、搔2、円形搔2、彫1、RF8、F134、礫562	黒55、珪頁45、凝頁15、頁90、緻黒安38、チ13、結片1、凝153、安玄90、シ56、安47、砂26、玄19、玄安18、黒頁16、泥13、輝9、閃7、火凝5、硬砂4、ヒ3、細閃3、千2、輝安2、浮凝1	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-12-S1	3×7	44	2.09	密度高い	ナ1、角1、削1、搔2、RF3、核6、F30		R1・R2
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-12-S2	2×2.4	9	1.87	小規模に散布	錐1、搔2、RF4、核2、F4		
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-12-S3	4×4.6	38	2.06		ナ3、角1、削3、RF4、核2、F27		R2
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-12-S4	3.8×5	21	1.1	やや密	ナ2、角2、搔1、RF1、核6、F21		R3
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-12-S5	3.8×5	12	0.63	密	ナ2、角1、RF2、F7		
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	13		80			搔1、RF3、UF1、F20、核1、亜石器8、礫46	黒17、凝頁7、緻黒安2、凝5、安40、砂1、玄安8	R1～4
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	14		3			ナ1、彫1、礫1	黒2、安1	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	15		110			角1、円形搔1、RF3、F27、核2、磨石1、亜石器9、礫66	黒2、珪頁12、凝頁14、緻黒安1、チ5、凝1、凝7、頁4、安52、砂1、玄安9、泥2	
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	II-15-S1	1.4×2	27	9.64	散漫	搔1、RF2、核3、F21		R1・R2
116	南葛野	B1L～B2M	II	8425	16		1			礫1	玄1	
120	川尻	B2UL～B2MU	V	4170	1	2.5×1.5	8	2.13	集中	ナ1、削1、UF2、核1、F3	頁8	礫群4他に礫4点
120	川尻	B2UL～B2MU	V	4170	2	4.5×3.2	18	1.25		削2、RF1、UF2、核2、F11	頁2、凝頁13、黒1、硬細凝1、珪頁1	第1号礫群
120	川尻	B2UL～B2MU	V	4170	3	2.5×1.2	4	1.33		ナ1、敲1、UF1、打痕礫1	凝頁1、凝砂2、黒1	第2号礫群
120	川尻	B2UL～B2MU	V	4170	4	3.5×2.5	25	2.86		ナ1、磨12、磨の可能性ある礫2、F8	硬細凝8、玄溶14、石閃1、黒1	第3号礫群

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その7)

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m ²)	各集中No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共存遺構等)
120	川尻	B2UL~B2MU	V	4170	5	—	2	—		核1、F1	硬細凝1、頁1	
120	川尻	B2UL~B2MU	V	4170	6	—	2	—		F2	凝頁1、硬細凝1	
283	根下	L2or B2U	I							角、ス、F、核、磨	黒、安	礫群4
335	用田鳥居前	B2L1~2	VI	1513	1	7.6×7.2	423	7.73	集中	槍1、角2、ナ5、 搔5、削22、敲8、 F307、Ch50、礫器 4、核18、不明1	黒、中凝、珪頁、ガ 安、頁、斑、硬細 凝、閃、細斑、安、 流	礫群1
336	葛原滝谷	B2L	VI	1025		9.0×6.8	43	0.70	散漫	ナ1、削2、礫器1、 核2、RF4、F33	硬細凝、ホ、黒、 ガ安、チ、砂、黒 頁、珪頁	礫群1
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	1	5.5×4.1	1 (71)	0.04 (3.15)	やや 散漫	削1	チ	礫群と同意 ()内礫を含む数
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	2	3.2×2.2	14 (62)	1.99 (8.81)	やや 散漫	削1、F11、核2	チ、黒、ガ安	礫群と同意 ()内礫を含む数
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	3	5.1×2.2	23	2.05	散漫	ナ1、F1、Ch12、核2	黒、ガ安	
339	用田大河内	B2U2 ~ B2L1	VI	1144	4	6.7×6.5	862	19.79	集中	槍1、角16、ナ23、 彫1、搔6、削20、 F520、Ch271、核4	黒、ガ安、チ	
339	用田大河内	B2U2	VI	1144	5	6.7×4.1	57	2.07	やや 散漫	ナ6、削2、F46、 Ch2、核1	ガ安、黒、細安	第1・2号礫群
339	用田大河内	B2U2	VI	1144	6	1.6×1.5	4 (24)	1.67 (10)	散漫	搔2、F2	硬細凝、ガ安	礫群と同意 ()内礫を含む数
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	7	2.6×2.4	21 (92)	3.37 (14.74)	やや 散漫	角1、削2、F17、磨1	硬細凝、ガ安、黒、 安	第1号炉址 ()礫を含む数
339	用田大河内	B2U2	VI	1144	8	2.9×2.2	74 (135)	11.60 (21.16)	やや 散漫	ナ2、F58、Ch2、敲 6、核6	ガ安、黒、硬細凝、 珪、安	第1~3号礫群() 礫を含む数
339	用田大河内	B2U2 ~ B2L1	VI	1144	9	1.7×1.4	14	5.88	散漫	F11、磨2、核1	硬細凝、ホ、黒、 富玄	焼礫9点
339	用田大河内 第6次調査	B2U1 ~ B2U2	VI	1850	1	2.1×1.0	3	1.43	散漫	角1、Ch1、核1	黒	
339	用田大河内 第6次調査	B2U2 ~ B2L1	VI		2	3.5×2.7	10	0.85	散漫	RF1、F3、Ch4、核 1、敲1	硬細凝、チ、中凝、 黒	
339	用田大河内 第6次調査	B2U2	VI		3	1.7×0.8	1(40)	0.74 (29.41)	集中	F1	黒	礫群と同意 ()内礫を含む数
339	用田大河内 第6次調査	B2U2	VI		4	1.3×0.2	—	—	—	—	—	礫群と同意 礫3点のみ
339	用田大河内 第6次調査	B2U2	VI		5	4.9×2.9	13	0.91	散漫	角1、円搔1、搔1、 削1、F4、Ch3、核2	硬細凝	礫群3
339	用田大河内 第6次調査	B2L ③	VI		6	2.3×1.1	6	2.37	散漫	F3、磨状石3	富玄、黒、硬細凝	
339	用田大河内 第6次調査	B2L1 ~ B2L ③	VI		7	0.6×0.1	2	33.33		磨状石2	富玄	磨石状石器2点の み
340	用田南原	B2U ~ B2L1	VI	1194	1	8.1×4.2	300	8.82	密集	角4、ナ6、削6、搔 1、F188、Ch86、核 3、敲1、磨1	黒、硬細凝、ホ、 チ、ガ安、細安、中 凝、粗凝、不明	礫群1基
340	用田南原	B2U ~ B2L1	VI	1194	2	5.3×2.8	58	3.91		角1、ナ6、削2、 F17、Ch10、核2、敲 1	黒、硬細凝、中凝	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	III	5940	1	5.2×2	15	0.99	散漫	F11、石核2、磨状 礫2	黒12、多安2、チ1	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	III	5940	2	4.3×3.5	30	1.99	北西 部や 集中	ス1、F22、核3、磨 状礫4	黒6、凝7、多安1、 頁1、ホ12、閃2、砂 1	1号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	III	5940	3	3.2×3.1	11	1.1	散漫	F11	黒10、ホ1	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	III	5940	4	3.1×2.3	8	1.12	散漫	F8	黒6、凝1、チ1	3号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	III	5940	5	13.7×8.6	124	1.05	満遍 なく 分布	角1、ナ9、ス10、 RF3、UF3、F96、核 1、磨状礫2	黒99、凝7、安2、 多安2、チ7、頁7	5号・7号・11号礫 群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	III	5940	6	5.1×3.2	42	2.57	中央 やや 密度 濃い	ナ1、ス1、RF2、 UF1、F20、核1、磨 状礫16	黒16、多安16、頁 10	8号礫群

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m ²)	各集中No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共伴遺構等)
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	7	2.5×1.8	20	4.44	中央密度濃い	ナ1、ス1、F18	黒5、安1、頁14	8号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	8	3.5×3.2	36	3.21	東側やや集中	ナ1、UF3、F28、磨状礫4	黒1、多安4、チ1、頁24	9号・10号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	9	2.3×0.5	8	6.95	細長い分布	F8	黒8	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	10	2.2×2	10	2.27	散漫	UF2、F8	黒9、頁1	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	11	3.6×3	38	3.51	北側やや集中	角1、ナ4、ス1、F30、敲1、磨状礫1	黒32、多安1、チ1、頁2、ホ2	14号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	12	1.7×0.8	5	3.67	散漫	F4、敲1	凝3、ホ2	16号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ	5940	1	7.2×2.2	17	1.07	北東方向に長い	UF1、F4、磨状礫12	黒2、凝1、ホ2、多安12	
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ		2	5.1×3.6	94	5.11	北西密度濃い	ナ3、UF6、F84、核1	黒93、凝1	
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ		3	5.3×3.2	25	1.47	北西方向長い	ナ3、F20、核2	黒22、凝1、ホ2	
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ		4	5.3×4.5	30	1.25	散漫	ナ2、ス2、UF1、F24、核1	黒27、凝2、ホ1	
364	福田丙二ノ区	B2LM	Ⅲ	1100	1	3.0×3.0	106	11.78	集中	ナ4(3)、F37、C63、核1	黒104	
364	福田丙二ノ区	B2LM	Ⅲ	1100	2	1.6×1.6	18	8.2	疎ら	F、C、核1、原材1	黒18	他に礫3点
367	吉岡X	B2U～B2L	V	41000	1	4.0×2.0	13	1.63		削1、彫1、RF3、UF1、削片1、F6	黒13	礫群3、配石1
367	吉岡X	B2U～B2L	V	41000	2	1.0×1.0	3	3.00		ナ1、核1、F1	黒3	礫群3、配石1
367	吉岡X	B2U～B2L	V	41000	3	4.0×2.0	93	11.63	集中	ナ5、彫2、穿孔器(錐)1、F85	黒93	礫群3、配石1
367	吉岡X	B2U～B2L	V	41000	4	5.0×3.0	63	4.20	集中	ナ2、搔1、UF1、核1、F58	硬細凝1、ガ黒安62	礫群3、配石1 礫群3と重複
367	吉岡X	B2U～B2L	V	41000	4外	－	2	－		楔1、F1	硬細凝1、F1	礫群3
368	津久井城跡馬込地区	B2LUU	4		1	3.3×2.2	7	0.96	散漫	ナ1、搔1、F2、核1、叩2	黒1、中凝5、不明1	1号礫群
368	津久井城跡馬込地区	B2LUU	4		2	7.2×5.7	24	0.58	散漫	ナ1、角1、搔4、削1、RF7、F9、核1	中凝11、黒9、閃1、チ2、石英1	2号礫群
368	津久井城跡馬込地区	B2LUU	4		3	6×5.7	25	0.73	散漫	F20、核3、叩2	中凝25	3号礫群
369	藤沢椎名谷遺跡	B2	1	64	1	4×3以上	228	19.1	密集	ナ20、搔1、削3、RF9、UF4、F185、核5、叩1	黒110、安106、凝5、頁2、流紋4、ホ1	1～3号礫群 (礫299点)

※1 器種組成 (ナ：ナイフ形石器、槍：槍先形尖頭器、搔：搔器、削：削器、彫：彫器、楔：楔形石器、叩：叩石、打斧：打製石斧、磨斧：磨製石斧、台：台石、核：石核、刃：刃器、MB：細石刃、MC：細石刃核、調F：調整剥片、磨状礫：刷石状円礫、UF：使用痕ある剥片、RF：加工痕ある剥片、錐：揉錐器、ピエス：ピエスエスキュー、スク：スクレイパー、切断：切断剥片)

※2 石材 (ガ安：ガラス質黒色安山岩、安：安山岩、角閃安：角閃石安山岩、粘：粘板岩、黒：黒曜石、チ：チャート、砂：砂岩、頁：頁岩、凝：凝灰岩、硬細凝：硬質細粒凝灰岩、珪凝：珪質凝灰岩、溶結凝：溶結凝灰岩、石閃：石英閃緑岩、花閃：花崗閃緑岩、泥：泥岩、ホ：ホルンフェルス、珪泥：珪質泥岩、硬砂：硬質砂岩、斑：斑礫岩、珪頁：珪質頁岩45、凝頁：凝灰質頁岩、結片：結晶片岩、安玄：安山岩質玄武岩、玄安：玄武岩質安山岩、火凝：火山礫凝灰岩、ヒ：ヒン岩、細閃：細粒閃緑岩、千：千枚岩、輝凝：輝緑凝灰岩、輝安：輝緑安山岩、浮凝：浮石凝灰岩、緑珪頁：緑色珪質頁岩、シ：シルト岩、多安：多孔質安山岩、玄溶：玄武岩質溶岩、石閃：石英閃緑岩、富玄：富士玄武岩)